

現生正定聚の思想的背景

延塚 知道

周知のように、現生正定聚は、『教行信証』、『愚禿鈔』、『一念多念文意』、『尊号真像銘文』等に依ると、「龍樹大士、曰、即時入必定、曇鸞大師云、入正定聚之教」と説かれ、七樹中持に龍樹、曇鸞が挙げられる。それは『十住毘婆沙論』の求道の課題である阿毗跋致が、『論註』では「仏力住持、即入大乘正定之聚、正定、即是・阿毗跋致」と説かれる。天親の『浄土論』には、阿毗跋致も正定聚も、それと同義語である不退転という言葉も一度も出てこない。しかしその註解である『論註』には、阿毗跋致と不退転が三回づつ正定聚が十回も出てくる。それは曇鸞が『論』の註解を通し本願の仏道を開顯する中で、五濁無仏の時を生きる無告の大衆に、不退転が事実となるのは、仏願力に乘じ正定聚に住することだけであることを説いて、師龍樹の大乗菩薩道の課題である阿毗跋致の意義を明確にしようとしたことが窺える。親鸞が、龍樹、曇鸞の二人を挙げられるのも、この『論註』に依られたことであろうと思われる。

したがって、『論註』に依って正定聚の意味を尋ねたいのであるが、初めに注意せねばならないことは、『十住毘婆沙論』では阿毗跋致が現生不退、初地不退と説かれるのに対し、『論註』では一応彼土不退、八地不退と説かれる。したがって、彼土と八地の二点の意味を確かめて、正定聚の意義を尋ねてみたい。

まず浄土の総相である清浄功德積では、「觀彼世界相勝過三界

道」と説いて、三界繫縛の衆生にとつて、浄土はどこまでも超越的世界と説かれる。下巻浄入願心章では「此三種莊嚴成就、由本四十八願等清淨願心之所・莊嚴、因淨・故果淨・非无・因他、因有・也」と、浄土が、阿弥陀如来の願心に莊嚴された報土として説かれ、衆生が有漏心を立場として志向し、そこから開かれる世界ではなく、如来の事業として法性が自己開示した涅槃界であることが示される。その限り、宿業の身の衆生にとつて、浄土は超越的な彼土と言わざるをえない。

しかし、『論』で二十九種莊嚴として説かれる真実功德相が、『論註』では不実功德と真実功德との相反する二つの事柄として説かれる。それは、不実功德を否定すべき虚妄性として、真実功德の外に排除することにより真実功德を抽象していく論理のあり方でなく、不実なる存在を否定契機として、我々の意識を超え、現成してくる真実功德の働きを表わすものであろう。それは、浄土莊嚴が不実なる衆生に虚偽顛倒なることを知らしめ、しかも真実功德の相で無限に内に抱んで、有限な衆生を無限な世界へ解放する、如来の願心の大悲の構造を示すものであろう。したがって浄土は、虚妄なる衆生にとつて、絶対の彼土として超越的涅槃界でありながら、無縁大悲の境涯として、衆生を撰し転じていく世界として説かれる。

さて、このような浄土が、下巻では仏土不可思議と説かれ、「仏土不可思議有二種力二者・業力・謂・法藏菩薩出世善根・大願業力・所成、二者・正覺阿弥陀法王善住持力・所・撰」と、その内景が願力と仏力とで示される。

周知のように、この願力と仏力が、不虛作住持功德にそのまますま説かれ、浄土を成就し住持していく阿弥陀如来の威神力として

説かれると同時に、ここでは、衆生が本願力に遇い見仏が成就される場所としても説かれる。衆生が本願に遇うという出来事は、宿業の身が法藏菩薩の願力に呼び覚まされ、宿業の身の命がそのまま本願を行じていく命へと見直され、尽十方無碍光如来の仏力加持によって願生者と決定せしめられることである。

この衆生の願生心の内景である願力と仏力が、そのまま浄土を成就し住持していく力であることは言うまでもない。したがって、宿業の身にとって絶対の彼土である浄土が、願生心にそのまま影を落し「不断煩惱得涅槃分」といわれるように無上涅槃の徳がそこに獲得されると言わねばならない。このように彼土の意義が尋ねられるなら、浄土の徳である正定聚は、そのまま衆生の願生心に先取りされる可言えよう。

さて、八地の不退について、不虛作住持功德では「即見^ニ彼^ニ未^ニ証^ニ淨^ニ心^ニ菩^ニ薩^ニ畢^ニ竟^ニ得^ニ証^ニ平^ニ等^ニ法^ニ身^ニ与^ニ淨^ニ心^ニ菩^ニ薩^ニ与^ニ上^ニ地^ニ諸^ニ菩^ニ薩^ニ畢^ニ竟^ニ同^ニ得^ニ寂^ニ滅^ニ平^ニ等^ニ故^ニ」^{ナリ}という「論」の文を註解して、「平等法身者・八地已上法性生身菩薩也」「未証淨心菩薩者・初地已上・七地已還諸菩薩也」と説かれる。更に、見仏は浄土へ願生することによって成就され「龍樹菩薩・婆藪槃頭菩薩輩・願生^ル者^ノ當^レ為^ス此^ノ耳^ト」と説いて、浄土へ願生することのみが、七地沈空の難を超えて、大乘菩薩道が成就されることが説かれる。

さて、煩惱具足の凡夫が直接阿弥陀仏に見ることができないにしろ、この不虛作住持功德に見仏が説かれるのは、願生心として働く願力と仏力の働きとして、阿弥陀仏に見るといえることが言えるからではなからうか。それは八番問答でも明らかのように、宿業の身の信知に宿業の大地とも言える人々を与えられ、共に浄土へ願生することである。なぜなら、本願が衆生を撰して如来であ

ろうとする如来の本願である限り、本願成就とは、如来の成就であると同時に十方衆生の成就でなければならぬからである。このように、本願に裏打ちされて共なる衆生を得ることは、そのまが同一に念仏する如来の聖衆として信知せしめられることである。なぜなら、生きとし生けるものが共通の根拠としている無上涅槃へ、宿業の身のままに願生心のみが遠く通ずるが故に、その願生心に与えられた同一念仏の衆生は、必ず、四海の内皆兄弟なりという信知と別のものではないからである。しかも、煩惱具足の身なるが故に、命終るまで願生心を成仏の道路として遠く通ずる無上涅槃に率いられて、無上仏道が行じられることとなる。

さて、先の八地の菩薩は、諸仏の勧めによって、救われないが故に教化されるべき量りなき衆生が示され、仏の智慧の涯底なき深さが示される。そこに、一切諸仏を供養し、量りなき衆生を開化する普賢行が行じられることとなる。実は、先述のように、宿業の身であるからこそ、そこに共なる衆生を与えられ、必ず滅度に至るという確信に支えられて無上仏道が行じられていく衆生の願生心に、この八地の菩薩の徳がそのまま働いていると言えらるではなからうか。それは、彼土不退・八地不退として説かれるが、今まで尋ねたように、衆生の願生心に浄土の功德が獲得され、現生のただ中で無上仏道が行じられ、宿業の大地とも言える人々を如来の聖衆と信知して、同一念仏の僧伽を賜わることである。

親鸞の現生正定聚が、このような曇鸞の指南に依られたことはまちがいないからう。ここに、愚悪の凡夫として、どこまでも専修念仏の教えを聞いていった親鸞が、そのままて大乘の論師という面目を持つのも、このような意味を持つ現生正定聚を、自らの思想の中核としていたことに、その一端を窺うことができよう。